

な方がたくさんいらっしゃって、そういった方たちとの交流が、ここに来たことによってずいぶん活発になりました。

区長 亡くなった大江健三郎さんと道でばったり会った、なんていうこともよくあったそうですね。

横尾さん 大江さんはご近所ですから、本当にばったり会うことが多くて。会うなり、僕の何かをご覧になっていたのか、すぐ感想を述べられるんですよ、それにはちょっとびっくりしますよね。瞬時にそういう感想がよく語れるものだなと思って。

区長 お天気が良いとか、そういうご挨拶とか省いて、もういきなりですか。

横尾さん 僕は天気の話ですとか、どちらへいらっしゃるんですかとか、そういう挨拶をするんですけれど、大江さんはいきなり芸術的な核心に触れる話をされるから油断できないんです。

区長 以前は黒澤明監督も近くにいらして。

横尾さん 黒澤さんは、よくアポイントメントも取らずに突然お伺いしましたね。お伺いすると4時間くらい映画の話をして帰ってくるんです。晩年はずいぶんお会いしましたね。

手が震えてまっすぐな線を
引けなければ、
震えた絵を描けばいい

区長 2020年から3年余り、新型コロナウイルス感染症が世界をおおい、世田谷区も大変な日々でした。異常な時期が3年近く続いてしまったわけですが、この間を横尾さんはどう受け止めていらっやいましたか。

横尾さん 肉体的なハンディキャップがもっとも頻繁に出た時期で、目が見えない、耳が聞こえない、手は腱鞘炎で筆が持てなくなった、と様々なことが重なったんですよ。だけど老齢になれば当然のことで、そのハンディを治すとか元に戻すより、ハンディを利用して絵を描く。線をまっすぐ引けないで線が震えたら、震えた絵を描けばいい、と考えて制作していました。逆に新しい作品が生まれます。

区長 手が震えた時点でもう絵は無理じゃないか、と考えてしまう人が多いのではないですかね。

横尾さん でも震えた絵を描くことは、頭で考えると難しい。だけど手が勝手に震えてくれるのだから、これを利用しちゃえと（笑）そういう開き直りが出てきました。

区長 すごいですね。横尾さんは今おいくつでいらっやいますか。

横尾さん 88歳です。

区長 できていたことができなくなると人はネガティブになることが多いものですが、それを逆転させる横尾さんの発想ですね。

横尾さん できないことはできないのであって、それを無理に元に戻す努力とか、そんなことはしないことですね。できることのキャパシティは小さくなりますが、その小さくなったキャパシティの中でやれることはたくさんあると思うんですよ。逆に、若い頃できなかったことができたりしますからね。

区長 表現するという行為が、生きるエネルギーになっているということはありますか。

横尾さん ありますね。クリエイティブなものに熱中すると、自然に健康になっていくような気がします。だからまだこの歳までなんとか生かされているのは、絵を描いているからだと思

いますね。これ、やめるとバタンキューかもしれません（笑）

区長 逆に若い人たちへ向けて、特にアートの世界をめざす若い世代に何かアドバイスはありますか。

横尾さん 本当に自分のやりたいことを突き詰めて、やりたいことだけをやる。これをやったらこうなるという妙な目的や計画を持ったり、結果を期待したりするのではなく、ただ描きたいから描く。そういう気持ちが大切だと思いますね。やりたいことに熱中することは、遊びの精神と結びつくんですよ。そしてそれこそがクリエイティブなものを生み出す原動力ですよ。

区長 今やりたいことを、そのまま純粋にぶつけていくということが大事だと。

横尾さん そうした時により作品、おもしろい作品が生まれると思います。展覧会をやって、誰かに認められて、ギャラリーがついて……そういう先のことを考えないで、若い人にはたった今やっていることに集中して、夢中になってもらいたいと思いますね。

絵を通して、心、あるいは魂といった
自分の内部とコンタクトする

区長 年を重ねて今なお、遊ぶことをクリエイティブと捉え精力的に制作されていて、4月からの展覧会は今から本当に楽しみです。

横尾さん ぜひ、見ていただきたいですね。僕の中には、絵を通して何か言いたいとか、主張したいとか一切ないんです。ですからただ絵の前に立って、頭で感じるのではなく、直接身体で感じてもらいたいです。

区長 絵に、答えや解釈を求めるような見方はしてほしくないということですね。

横尾さん 大義名分で絵を見ている人が多いんですよ。大義名分じゃなくて、目的も結果も全て捨てた状態で、裸一貫で絵の前に立っていただきたい。わからなければ、わからないでいいんです。わからないということがわかったわけだから。

区長 しかし解釈や意味を考えずに見るというのも難しいものですが……。

横尾さん 解釈というのは、知的な作業です。そういう頭の働きの部分をいったん外して、心、あるいは魂といった自分の内部とコンタクトする。美術作品との関わりとは、そういったことが大事です。そもそも、人は外部とコンタクトしすぎです。外部ってろくなことが起こらない。戦争をやったり、気象異変が起こったり、人間が生きていく上でネガティブな要素が多すぎますよね。絵や美術、芸術をきっかけにそこから自由になって、自分の内部とコンタクトして、さらに自由になった自分を見つけてほしいと思います。

区長 展覧会を見た後、別の自分になっているような期待が持てるお話です。

横尾さん そういう意味で芸術、文化、美術にうんと興味を持ってもらいたいです。興味が芽生えたら、美術館に足を運ぶだけで十分だと僕は思っています。美術館へ行ってお茶飲んでアイスクリームを食べて、それでもいいんです。そういう習慣をつけてもらって、「なんのために自分は美術館に来たんだ？」とそんなことも考えない。日常にそうした余白、余裕、遊びを持ってもらいたいですね。

区長 そうした意味では世田谷には、大変よい環境が整っています。世田谷美術館をはじめ文学館もありますし、パブリックシアターやシアタートラムでは演劇を見ることができます。これからも多様で豊かな文化環境を創造していきたいと思います。

横尾さん そういったものを^{どんよく}貪欲に利用してほしいと思いますね。という僕もそんなにできているとは言えないのですが、これからは利用したいと思います。

区長 では最後に横尾さんの今年の抱負をお聞かせいただけますか。

横尾さん 抱負は……ないですよ（笑）抱負を持つとそれが目的になるでしょう。そうするとまた、つらくても努力したり、励んだり、そこに妙な欲望も芽生えてきますからね。だから僕の場合は来るものは拒まずといった姿勢で、与えられたものは「これは僕のために与えられたものだ」というふうにとらえて、それを大事にしていくということしかないんじゃないかなと。それが抱負といえば抱負です。

区長 私もあり四角四面の抱負にはしばられたくありませんが、災害が多いので、その備えはできるだけしっかり整えていかなければならないと考えています。また、若い人をはじめ、多くの人が元気をなくしてしまっていたり、孤立や孤独になっていたりしているという問題もあります。様々なコミュニケーションの場があり、出会い、希望を持ってお互いを励まし合いながら生きることができる、そんな世田谷区であればよいなと思っています。横尾さん、今日はありがとうございました。展覧会楽しみにしています。

横尾さん こちらこそ、ありがとうございました。



横尾忠則《23-06-10》2023年 作家蔵

「横尾忠則 連画の河」展

会 期 4月26日(土)～ 6月22日(日) (予定)

会 場 世田谷美術館

2023年春から約2年にわたって制作された、150号の大作を含む約60点の新作を中心に展示。



詳しくは、世田谷美術館のホームページをご覧ください▶▶▶